

# 図書館 1 階に展示室新設—学内 MLA をめざして—

あらい けいこ  
新井 圭子

(三田メディアセンター課長代理)

## 1 はじめに

三田メディアセンター(以下、三田 MC)に、2011 年秋展示室がオープンした。新築された南校舎に PC エリア、グループ学習室の機能を移し、それに伴い 2011 年 3 月に 1 階オープンエリアの PC を撤去した。その跡地を利用しての展示室の設置である。

三田 MC の貴重書をはじめ特色ある多くの蔵書を、広く地域や社会に公開する機会を作るのが目的である。また、福澤研究センター、斯道文庫、民族考古学専攻など学内他機関と連携し、三田キャンパスで所有する重要な文化財その他についても公開・展示する機能を持たせて、ユニバーシティ・ミュージアムの一端を担うものと期待されている。

三田 MC 展示委員会主査の立場で展示について、および展示室設置に向けてのこれまでの準備と今後の展望について述べたいと思う。

## 2 三田 MC における展示

三田 MC における展示の歴史は長く、明治 45 年(1912)に慶應義塾図書館(現在の旧館)の開館式の行事の一つとして展示が 7 日間行われた記録がある。大正 3 年からは、初代図書館監督(館長)田中一貞の発案で、毎月一週間書籍の展覧会が催された。これは当時、学生が書庫に自由に入れなかったため、月ごとに題目を決めて書庫の図書を予備の閲覧室に陳列して見せたものであり、アメリカの図書館で行われていた公開書架(オープンシェルフ)を兼ねた展覧会であった。当時の記録によるとかなりの冊数が展示されたようで、図書を手にとって見られることが学生の読書心を大いに向上させていたことがうかがえる。大正 7 年からは、年平均 4 回の図書館展覧会が開催された。

昭和初期には小泉信三が図書館長在任中に、福澤先生伝記完成記念展覧会をはじめ、慶應義塾創立七十五年記念西洋経済思想史展覧会、百年祭記念ゲート展覧会などが、高橋誠一郎が図書館長のときには、マルサス歿後百年記念展、アダム・スミス歿後百五十年記念展覧会などが開催された。その後も年に 1、

2 回の頻度で行われたが、学内の学会が主催する展覧会に場所を提供する形が多くなったようだ。

戦中戦後は展示が行われない時期が長く続いたが、昭和 20 年代後半になると展覧会が復活し、また昭和 30 年代、高村象平の館長時代には、従来の展覧会を開催する一方で、学生のための啓蒙的な展示を常に行うことが計画され、展示ケース 2 台が閲覧室に設けられた。記念すべき第 1 回は「咸臨丸」に関する資料の展示で、以後 2 週間ごとに内容を変えて続けられた。この展示が現在行っている展示委員会主催の図書館小展示の原点になるのではないだろうか。

昭和 57 年の慶應義塾図書館(新館)開館を機に、展示会場の状況が大きく変わった。旧館の展示室がメディアセンターの管轄でなくなったため、規模の大きい展覧会は図書館外で開催されることになった。また、館内展示用には新館 1 階レファレンス・ルーム入口に展示ケースが据え付けられたことにより旧館時代の 2 倍の資料が展示できるようになった。

館内展示とは別に学外開催の展示として、年 1 回丸善書店のイベントスペースにて慶應義塾図書館貴重書展示会(いわゆる丸善展示)を開催している。初回の「キャクストンとアーサー王伝説展」(1985)から昨年度の「経済学の源流」まで 23 回を数える。企画テーマを専門とする教員に監修を依頼し、貴重書担当を中心に 5~6 名の図書館スタッフが会場提供者である丸善株式会社の企画担当者とは合を重ね、準備から展示までを行っている。展示図録も作成して販売し、展示会に合わせた監修者等による講演会も行っている。会場が丸善日本橋店か丸の内店という地の利もよさもあって、毎回多くの来場者があり、リピーターも少なくない。

展示委員会主催の館内小展示は、貴重書が中心であるが、毎月のテーマに応じて準貴重書や一般図書にまで範囲を広げて展示している。丸善で行った貴重書展示のダイジェスト版、夏季スクーリング展示、新収貴重書展示など定番のものもある。現在、メン

バーは貴重書担当1名を含む5名で担当しており、展示用の専門員がいるわけではない。企画から展示資料の選定、展示、展示目録作成、広報が主な業務となる。皆、本務をかかえながらの作業となるので多少の負担はあるが、展示のための蔵書調査や展示目録作成などに関わることにより、テーマや蔵書への理解を深めることができるだけでなく、企画力や表現力、美的センスなどを磨くことができると考える。また、断片的に個々に購入した図書を展示テーマに則して集めることで、蔵書を系統立てて収集する一助にもなる。調べていく過程で埋もれていた興味深い資料を見つけたときには小さな喜びとともに遣り甲斐も感じる。

学生が普段古刊本を閲覧することは極めて稀であるので、展示を通して同じタイトルの図書でも刊行された当時のオリジナル装丁で見るとは、著者の生きた時代の空気を直に感じる貴重な体験になるであろう。三田 MC の展示資料には作家の原稿や書簡など、手稿と呼ばれるものもあるので、より著者に親近感を持つこともできるだろう。

2011年1月からは会期をこれまでの2週間から1ヶ月に延長して途中で資料の入替えも行い、4月からは大型展示ケースが1台増え、より多くの資料を見てもらえるようにした。撤収時には配布資料の展示目録が殆ど残らないことから、多くの人に見学されているという手ごたえを感じる。

最近のところでは、3月に民俗考古学専攻から依頼を受け、日本オリエント学会の国際会議開催に合わせて、図書ではなく古代の女神像(考古資料)を展示するという初の試みを行ったが、開始後運悪く東日本大震災に見舞われた。展示品の被害はなかったもののその後の余震もあり、安全確保が難しく中止となったことは残念であった。

三田 MC における展示の歴史については、さらに詳しく書かれた文献があるので参照されたい<sup>1)</sup>。



丸善展示



館内小展示

### 3 一橋大学との共同企画展示

2010年度の人事部の部門別研修として、一橋大学附属図書館(以下、一橋大学)と慶應義塾図書館との共同企画展示を実施した。これは新しく展示室を設置するにあたって、公開展示の企画・運営管理の能力を育成することを目的に、以前より公開展示を行っている一橋大学に協力いただいたものである(2004年より三田 MC と利用協定を結んでいたことも協力を進めるうえでプラスに働いた)。三田 MC からは筆者他2名、一橋大学からは展示を主担当としている専門助手1名と図書館スタッフ1名が参加した。双方の図書館が所蔵する資料を共同企画展示をとおしてより意味のある形で発信しようというものであった。企画展示は「大江戸商売繁盛記 一所蔵貴重資料から」と題して、会場は一橋大学の展示室にて2010年11月4日～11月19日に行った。

商法講習所を源流とする一橋大学には、江戸時代の商業に関する貴重な資料が豊富で、「大伝馬町長谷川木綿店古帳」、「札差関係資料」などを中心に古刊本や江戸の古地図などが展示された。慶應からは「江戸鳥瞰図」「菱垣新綿番船川口出帆之圖」などの錦絵

のほかに、古金銀貨幣コレクション(昭和15年に講談社創業者であり、元報知新聞社社長であった野間清治未亡人より寄贈の272点のコレクション)などを出品した。また、会期中に講演会も開き、双方で講演者を立てた。一橋大学からは江戸東京博物館学芸員の市川寛明氏が「木綿問屋長谷川家の経営と大伝馬町」を、慶應からは文学部教授の井奥成彦が「近世後期の江戸商業—上方依存脱却への道—」の講演を行った。展示の入場者数は1,747人(過去最高)、講演会の参加者は65人であった。

数回の合同打合せのほかに、メール連絡を重ねて、お互いの所蔵資料の情報交換をし、展示資料選定とレイアウト、スケジュール管理をした。パンフレットは外注で作成したが、ちらし、キャプション、解説パネルは、自前で作成した。完成度の高いパネル作成方法やギャラリートークなど公開展示の手法を学ぶことができ、今後の自館の展示にも生かしていきたい。講演会については、当日が日曜日であったために入場者数を予測できないという難点があった。一橋大学で地域も含めて広く広報し、慶應側でも学生、塾員に向けて広報したが、地理的に離れていることもあってか、展示に比べて講演会の参加者は少なかった。

また、同時期に三田MCでも同じテーマで小展示を行い、一橋大学で開催中の共同展示を紹介するようになった。今回の共同展示は、双方にとって初めての試みであったが、他大学と共催することで、外部へのアピール度が増し、それぞれの館が所蔵する特色ある資料を分担、補完することのメリットを活かし、より奥が深い内容の展示を実施することができた。



#### 4 他大学の図書館展示室見学

新しい展示室の参考にするために、公開展示を行っている大学について調査したところ、約20の大学が博物館、展示資料館を設置していた。そのうち三田MCと同程度の蔵書数がある図書館の殆どに展示室があることがわかった。今回いくつかの展示室を見学させていただいたので、ここで紹介したい。

##### (1) 一橋大学附属図書館

共同企画展示を行った一橋大学には、図書館建物の正面入口を入り、入館ゲートの手前に独立した展示室がある。2001年に事務室を改修したもので、床面積77m<sup>2</sup>で、ベージュ系の落ち着いた色調の部屋となっている。展示ケースは可動式のもの的大小合わせて13台あり、企画に合わせて数を調整している。もともと事務室だったので展示室右手に窓があり、カーテンで遮光している。企画展示は年1回の一橋祭にあわせて2週間ほど行い、期間中に1回講演会を行う。特別展示として、オープンキャンパス、ホームカミングデーなどのイベントにあわせたものや記念展示、追悼展示などを時々で開催している。その他に学園史、図書館所蔵コレクションを紹介する常設展示と過去に行った展示のリバイバル展示がある。2名の専門助手のもとにA・B2班の展示ワーキンググループが活動している。

展示室が入館ゲートの手前にあることが、一般の来館者を受け入れやすくしている。企画展示とオープンキャンパス、ホームカミングデー(各1日開催)のときのみ、開室中(9:00~17:00)は有人の受付があるが、普段は無人で、防犯カメラが設置されている。また、入口には来館者カウンターが設置されていて、来館者数を正確に把握できる。見学者の所属身分(大学関係、その他)を簡単に識別できる芳名帳も工夫されており参考になった。

## (2) 天理大学附属天理図書館

天理大学附属天理図書館（以下、天理大学）の展示室も見学した。広大な柚之内キャンパスの中でもひととき重厚な造りの本館図書館にあり、見学をした際にはちょうど開館 80 周年記念特別展を開催中だった。図書館入口を入ってすぐの階段を上がり、2 階に 2 部屋続きの広い展示室がある。展示ケースなどの什器類は 1983 年に管内作業所にて作成したものだそうだ。敷地が広いため図書館に地下書庫を作るという発想がなく、三田 MC で懸案となっている湿気による黴の心配もほとんどないとのことで羨ましい限りである。展示室は個別空調になっているが、普段の温室度設定については展示ケース内に調湿剤と乾燥防止の水を設置することで対応し、夏季休館・全館冷房停止期間には展示資料を撤収している。

企画展示は毎年 10 月中旬～11 月中旬に行い、図書館講堂で記念講演も行っている。それ以外の時期は常設展示をしているが、基本的には閉室にしている、見学の申し込みがある都度開室して入館してもらう運用をしている。

## (3) 早稲田大学図書館

早稲田大学では創立 125 周年を記念して大隈記念タワーに新たに設置された 125 記念室を中心に、キャンパス内に散在する展示室を見学させてもらった。早稲田大学には文化推進部という部署があり、学内の文化的活動をここで集約しており、3 機関（會津八一記念博物館・坪内博士記念演劇博物館・大学史資料センター）の主管・サポートをしている。協定関係にある地域との共催企画展示なども多く行っていて、OB を含めた学外との対応窓口になっている。

125 記念室は、大隈記念講堂の時計塔の頂点 125 尺（約 38 メートル）と同じ高さに位置しており、部屋からは大隈記念講堂、早稲田キャンパス、旧図書館（會津八一記念博物館）、赤煉瓦校舎等が展望できる。展示室では、学内の各機関で所蔵している貴重な資料を年間とおして展示している。床面積は約 200m<sup>2</sup> で、エアタイトの壁面ケース 8 ケース、平面ケース 4 台、タワーケース 2 台がある。天井にレールがあり、ピクチャーレールや移動壁に対応可能になっている。また、壁面にはマジックテープ用の素材が使われていて解説文やパネルを掲示するのに便

利である。防犯対策として防犯カメラが 3 台設置されている。開館時間（10:00～18:00）には受付担当者が入館者をカウントし、展示期間外は施錠する。

大隈記念室は大隈重信関係の資料を常設展示で見たいという要望を受けて、創立 125 周年を記念して開設した展示室で、写真や愛用の品（多くは複製品）が展示されていて、いつでも気軽に見学できるようになっている。

會津八一記念博物館は旧図書館の大閲覧室を改装したもので、荘厳でクラシカルな雰囲気のとっても広い展示スペースがある。東洋美術部門、考古学部門、近代美術部門がそれぞれ年 1 回の企画展を開催し、常設展示室でもそれぞれの分野の特集展示を行っている。考古学資料の展示物が多いので、ケースは免震対応となっている。

## 5 新展示室

展示室の工事は 2011 年 8 月中旬の夏季一斉休館中から始まり、9 月 26 日に引き渡しされた。

場所は図書館入口を入って 2 階へ上がる大階段のすぐ後ろ、オープンエリアの跡地の一角になる。床面積は 70.4m<sup>2</sup> (6.35m × 11.09m) で、この面積には隣接してできる倉庫部分も含まれる。天井の高さは 3.2 m、空調は個別空調、照明は調光機能付 LED 電球のダウンライトとスポットライトになるが、白色系と暖色系を交互のラインで取り付けることにより、展示内容によって雰囲気を変えることができる。展示ケース内は紫外線カットタイプの蛍光灯が付く。建築時に目録ホールとして設計されたスペースには大きな窓があるが、紫外線カットフィルムを貼り、薄いカーテン、遮光カーテンを二重にすることで光の調節を行う。浮世絵等の光に弱い展示資料の場合には、遮光カーテンを使って自然光を完全に排除し照明のみで照度をコントロールできるようにする。淡いグレー系の壁面は一部をマジックテープ着脱可能なクロスにし、パネルやキャプションの掲示が容易にできるようにする。展示ケースは作り付け壁面展示ケース（W4m × H3.2m × D1.2m / 気密性能：エアタイトタイプ）と大型平面展示ケース（W1.8m × H0.9m × D1m / 気密性能：エアタイト型）1 台、中型平面展示ケース（W1.5m × H0.9m × D0.6m / 気密性能：自然循環型）2 台と現在使用しているグーテンベルク聖書用縦長のケースを置く予定である。壁面

ケースは高さと幅があるので、今まで展示が難しかった掛軸や巻子本などの展示が可能になる。またケース内の展示壁面には可動式のガラス棚を設置することにし、容易な展示位置の変更に対応できるようにした。展示備品として、斜台やブックエンドとしても利用可能なサイズの透明の亚克力製ブックレストをオーダーメイドで製作した。

設計の際に考慮した点は、入口から1階フロアの奥(ラウンジ)まで、なるべく視界を遮ることなく見通せるように部屋の形を長方形にしたことである。展示室の外壁とエレベータホール間に少し余裕の空間ができるので、風景と化していた新築当時の彫刻も息を吹き返すことになる。(本誌掲載の「保田春彦『都市』」を参照されたい)また、展示室の外側の壁面は一面すべてを掲示板として有効利用できるようにポスターなどを貼れる仕様とする。展示室の入り口ドアは閉じていても中を見通せるようにガラス窓がついたものとなる。開室中は特に係員をおかない運用を予定しており、防犯対策としてのカメラの設置や入館者数を把握するためのカウンター設置も考えている。決して広くはないが、落ち着いた空間になることを期待している。

## 6 今後の展望

公開展示の際の運用については、展示見学目的の外部入館者をどのようにコントロールするかが当面の最大の課題であった。また、見学希望者や見学者からの問い合わせや質問をどこで受けるかなど、これまで未経験のことなので調整を必要とした。

初回の展示は2011年10月に「慶應義塾図書館所蔵庄内史料展」を開催した。これは8月に山形県鶴岡市の致道博物館で開催している同名の展示にあたり、慶應義塾図書館所蔵の庄内関係資料のなかから102点を出品しているが、それとほぼ同じ内容の展示を10月と12月の2回に分けて展示することを考えている。庄内地方は2001年4月に開設された慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス(TTCK)があり、義塾とゆかりの深い地域であるが、明治時代末から昭和期にかけて、慶應義塾図書館には初代図書館監督(館長)で鶴岡出身の田中一貞をはじめ、多くの庄内出身者が勤めていたことがあり、庄内関係史料が多数所蔵されている。庄内地方では散逸されてしまった貴重なものも含まれる予定である。11月には図書

館所蔵の和・漢・洋のなかから選りすぐりの貴重書を展示することを企画している。

今後、毎月企画展示を行う予定であるが、福澤研究センターや斯道文庫などとも連携して学内MLA(Museum, Library, Archives)を実現できればと思う。また、福澤諭吉、田中一貞、小泉信三、三田文学ライブラリーなどをテーマとした常設展示も検討している。

来年は慶應義塾図書館(旧館)が開館して100年を迎える記念すべき年である。慶應義塾図書館の歴史に関する資料や歴代館長が収集した貴重書を中心とした図書館旧館開館100年記念展示(2012年8月一斉休館明け~10月末)を予定している。このために通常の展示委員会とは別の委員会を立ち上げてプロジェクトとして取り組み始めている。夏には私立大学図書館協会総会・研究大会が開催されるが、慶應義塾大学が会場校となるので、多くの人に見てもらいたい。このような節目の記念展示では、普段公開する機会のない『ゲーテンベルク聖書』のような稀覯書を公開することも検討できよう。

三田MCで所蔵する貴重な資料を次の時代に間違いなく繋げていく義務がある以上、展示できる資料や日数には限定が伴い、十分に紹介することはできないものの、公開展示をとおしてデジタル画像では味わえない本物のチカラと、時を経てきた歴史や先人の知識を多くの人に感じてもらえればと思う。ぜひ足をお運びいただきたい。

## 参考文献

- 1) 小沢恒二. 三田における資料展示の流れ. KULIC. 1992, vol. 26, p. 49-52.